



平成30年3月27日  
規制改革推進会議  
公開ディスカッション

# 在宅医療における薬剤師の役割

公益社団法人 日本薬剤師会

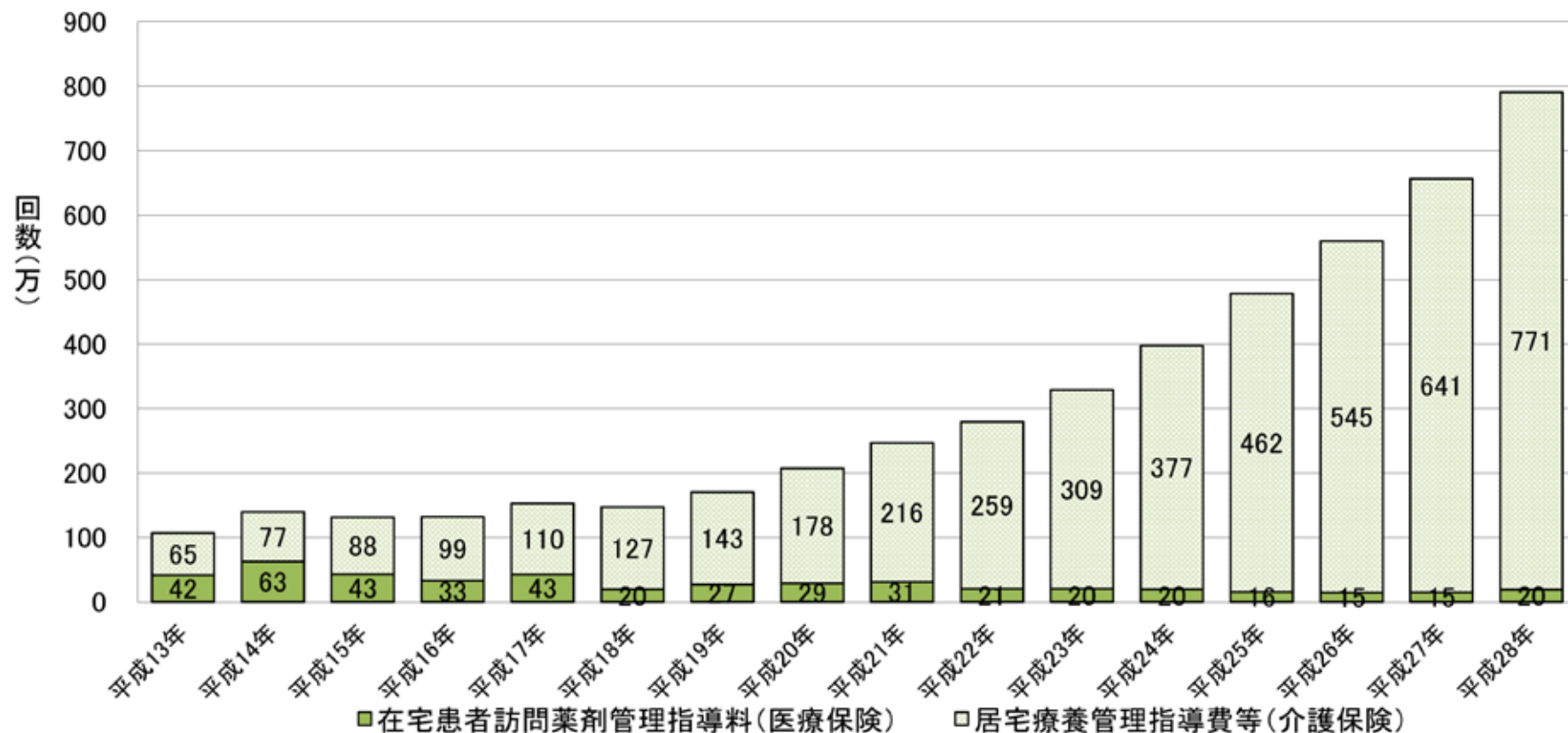
- 在宅医療で必要な医薬品等の供給体制の整備  
(医療用麻薬、無菌製剤、医療材料等を含む)
- 在宅患者に対し、薬剤師が過不足なく訪問薬剤管理指導を提供できる地域体制を整備
- チーム医療の一員として、かかりつけ医など多職種と連携した訪問薬剤管理指導の実施
- 訪問薬剤管理指導業務の質の向上

- 薬局数 58,678薬局 (平成28年末)
- 薬局に従事する薬剤師 172,142人 (平成28年度末)
- 薬局 / 人口1万人 4.6薬局 (平成28年度末)
- 訪問薬剤管理指導届出 48,402薬局 (82%) (同8月)
- 在宅業務実施薬局数 (同6月)
  - 医療保険 5,157薬局 (11%)
  - 介護保険 16,204薬局 (33%)

**既存の地域薬局が機能することが重要**

# 薬局における在宅患者訪問薬剤管理指導の実施状況

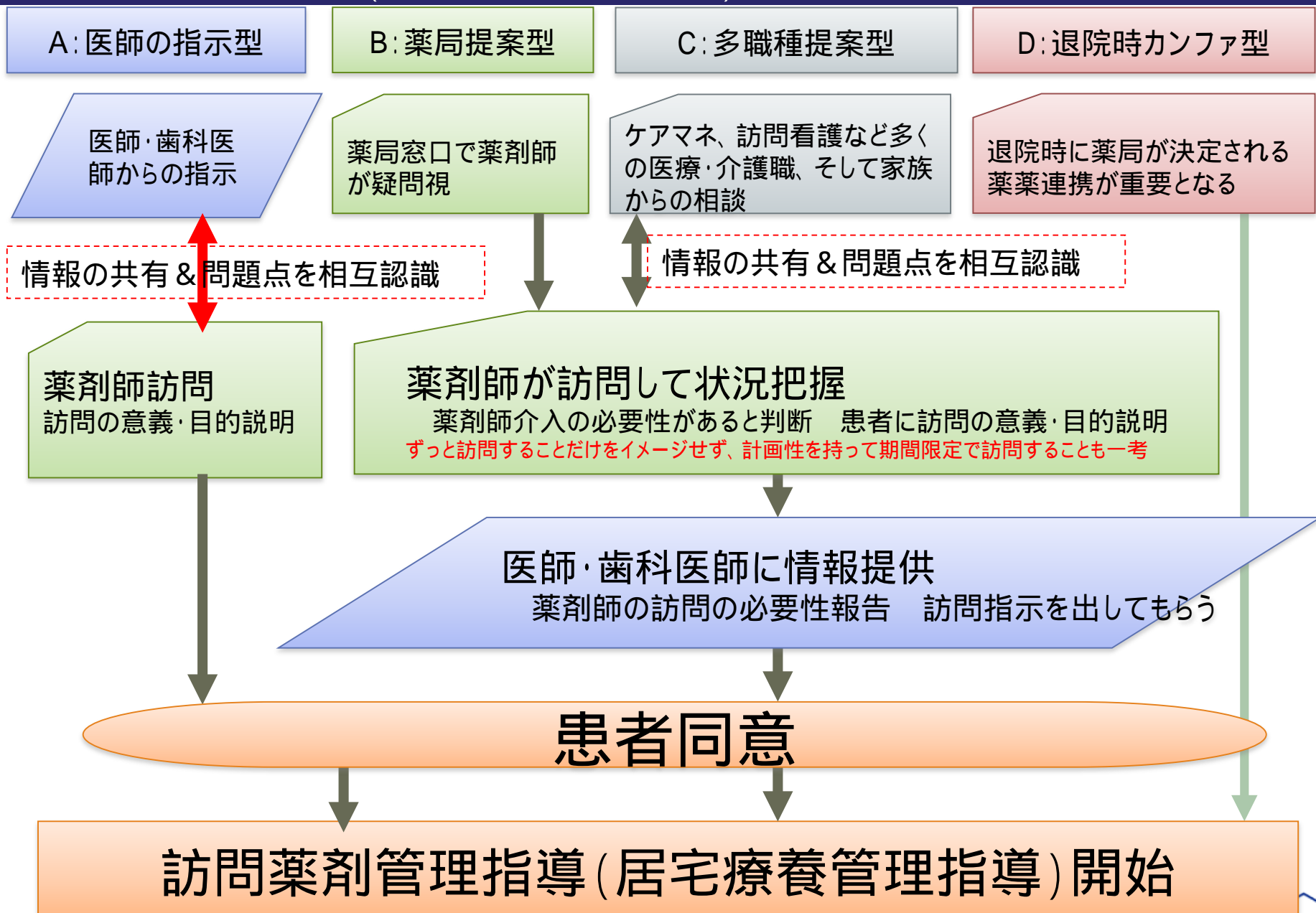
○ 介護保険における「居宅療養管理指導」に係る算定回数が伸びており、全体として薬剤師による在宅における薬剤管理は進んでいる。



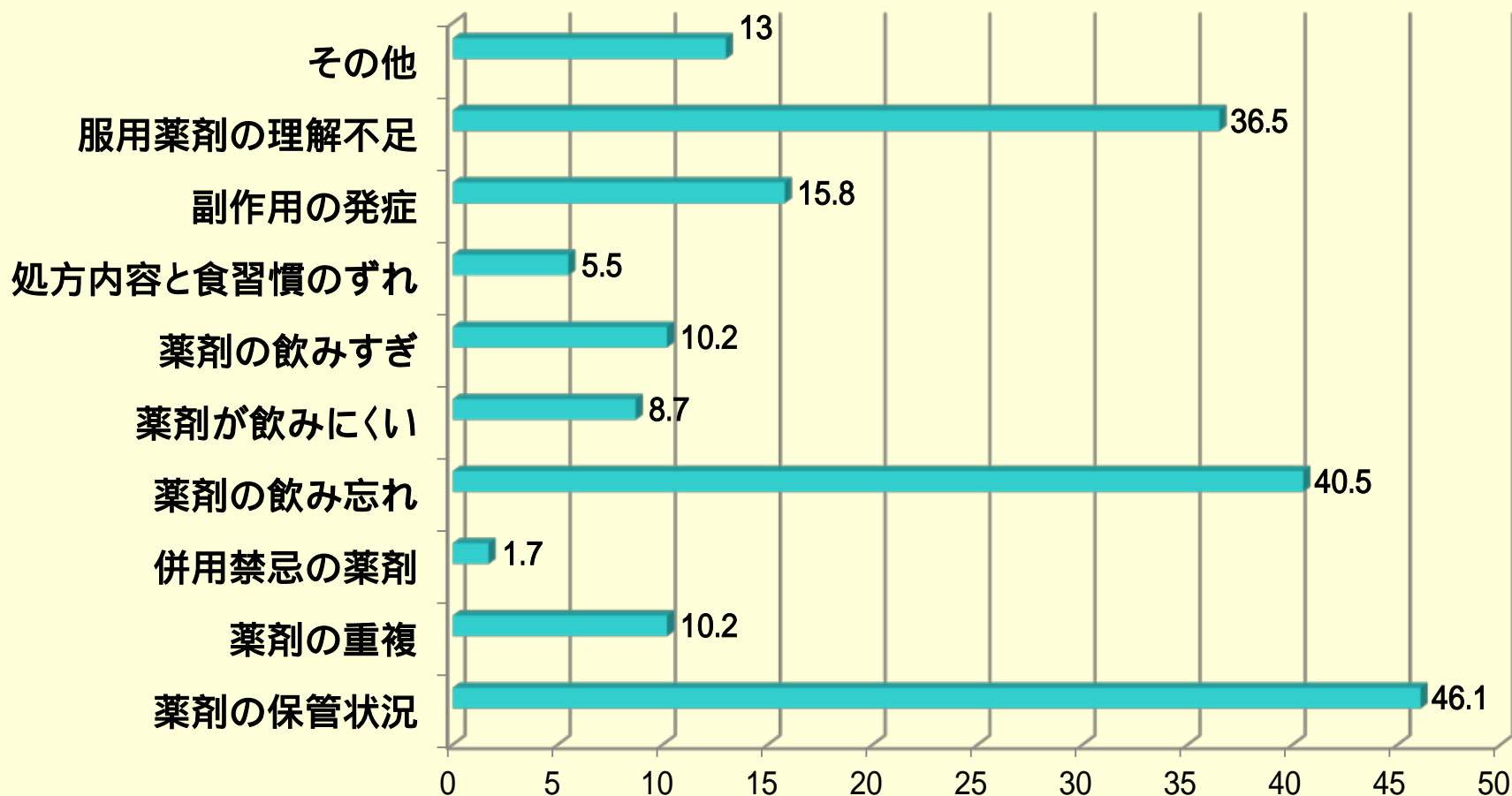
注) 在宅療養を行っている患者に係る薬剤管理指導については、対象患者が要介護又は要支援の認定を受けている場合には介護保険扱いとなり、認定を受けていない場合には医療保険扱いとなる。

出典) 社会医療診療行為別統計及び介護給付費実態調査を基に医療課で作成

# 訪問薬剤管理指導(居宅療養管理指導)開始に至る4つのパターン



# 在宅訪問開始時に発見された薬剤管理上の問題点



出典)平成19年度老人保健事業推進費等補助金「後期高齢者の服薬における問題と薬剤師の在宅患者訪問薬剤管理指導ならびに居宅療養管理指導の効果に関する調査研究」

# 在宅医療における薬剤師の主な役割

患者への医薬品・衛生材料の供給  
患者の状態に応じた調剤(一包化、簡易懸濁法、無菌製剤等)  
薬剤服用歴管理(薬の飲み合わせの等の確認)  
服薬指導・支援  
服薬状況と副作用等のモニタリング  
残薬の管理  
医療用麻薬の管理(廃棄含む)  
在宅担当医への処方提案等  
ケアマネジャー等の医療福祉関係者との連携・情報共有



在宅患者への最適かつ効果的で  
安全・安心な薬物療法の提供

患者の居宅等において薬剤師が行うことができる  
( = 行わなければならない) 調剤の業務

処方箋の受領(受け付け)

処方箋が偽造でないこと、または、ファクシミリ等で電送された処方内容と処方箋の原本が同一であることの確認

処方医への疑義照会

処方医の同意を得て(疑義照会)、当該処方箋に記載された医薬品の数量を減らすこと

服薬指導、薬剤情報提供

薬剤の交付

薬剤の計量・粉碎・混合等の調製行為は、薬局において行わなければならない(居宅での実施は不可)。



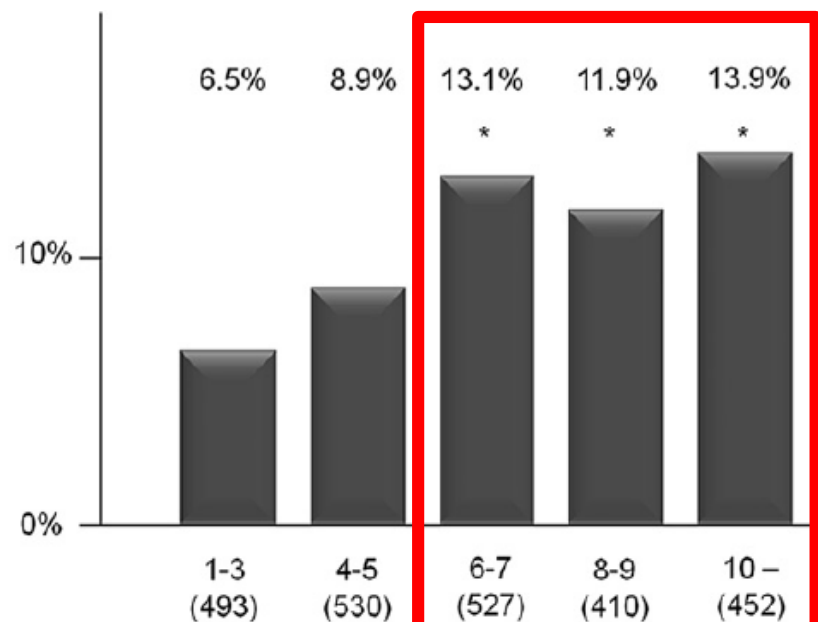
- | 複数の疾患を合併
  - ・複数の診療科、複数の医療機関を受診
  - ・多剤服用による誤服薬
  - ・重複投薬、薬物間相互作用のリスク大
- | 理解力、記憶力の低下
  - ・アドヒアランス、誤服薬、残薬
- | 視覚や聴覚機能の低下
  - ・誤服薬、アドヒアランス、残薬
- | 生理機能、生体機能の低下
  - ・腎機能、肝機能の低下に伴う体内薬物動態の変化
  - ・生体機能の低下による転倒、嚥下障害

# 多剤処方の問題点 ~ 有害事象の発生 ~

- 高齢者では、6剤以上の投薬が特に有害事象の発生増加に関連している。
- 高齢者の薬物有害事象は、意識障害、低血糖、肝機能障害、電解質異常、ふらつき・転倒の順に多かった。

高齢者の投与薬剤数と有害事象の関係性

薬物有害事象発生率



投与薬剤数

高齢者の薬物有害事象の主な症状	薬物有害事象を呈した者の症状の内訳
意識障害	9.6%
低血糖	9.6%
肝機能障害	9.6%
電解質異常	7.7%
ふらつき・転倒	5.8%
低血圧	4.8%
無動・不随意運動	3.8%
便秘・下痢・腹痛	3.8%
食欲不振・吐き気	3.8%
徐脈	3.8%
出血・INR延長	3.8%

2013年4月～2014年3月に大学病院老年科5施設(杏林大学高齢医学科、名古屋大学老年内科、東北大学老年科、大阪大学老年・高血圧内科、東京大学老年病科)に入院した65歳以上の患者の薬物有害事象を調査した。

- 患者数: 700名、平均年齢: 81.5歳(男性46.1%)
- 薬物有害事象を呈した患者数: 104名(14.7%) 上記表は、そのうち102名の症状の内訳

- 1995年～2010年に東京大学病院の老年病科に入院した65歳以上の高齢者2,412人(年齢: 78.7 ± 7.3歳、男性51.3%)の薬物による副作用を後向きに調査。

- 投与薬剤数は6.6 ± 3.6剤。252人(10.5%)に副作用を確認。

出典: Kojima T, Akishita M, Kameyama Y, et al: High risk of adverse drug reactions in elderly patients taking six or more drugs: analysis of inpatient database. GeriatrGerontol Int. 2012; 12: 761-2.

# 個々の患者に適した調剤設計

錠剤、カプセル、散剤が飲めない

対応策

服薬に関する因子を評価し、患者さんごとの適切な服薬形態の選択と医師への提案する。嚥下ゼリー、オブラート、簡易懸濁法などの導入も検討課題となる。

理解力  
(服薬拒否等)

嚥下能力

身体能力

服薬指導

適切な剤形の検討

服薬介助検討

散剤  
細粒剤  
水剤  
外用剤  
注射剤

速崩壊性薬剤

錠剤粉碎

簡易懸濁法

ゼリー製剤

とろみ添加  
栄養補助食品

服薬補助ゼリー  
水分補給ゼリー

経皮吸収型薬剤

鳴門山上病院診療協力部長 賀勢泰子氏作成資料を基に日本薬剤師会にて作成